

夢のつづき

国際基督教大学高等学校 二年 日下部 文香

高校生になり、いつもどこかで考えている。

ステイブ・ジョブズは、どうしてステイブ・ジョブズなのだろう。村上春樹はどうして村上春樹なのだろうか。

もしもジョブズが、彼のよい理解者だった友人に出会っていなかったら。そもそも機械工学に興味を持っていなかったなら。私たちはいまだにガラケーを使っているだろう。もしも村上春樹に、野球場で執筆の衝動に駆られた、あの体験がなかったら。読書より勉強を優先させていたなら。ベストセラーの数々は、きっと生まれることがなかった。

私は、才能のある人はなるべくしてそうだったのだ、と思わずにはいられない。たくさんの奇跡を引き寄せ、それらをつかみとる。だからこそ彼らは、自身を超え世を革新させていけるのだろう。

なぜこう考えるようになったかといえば、新しい環境の中で同級生の豊かな才能に圧倒されているからだ。

例えば、新鮮な体験があった。私は、絵の才能を感じていた同級生に何気なく訊いた。

「なんでそんなに絵が上手いの。」

いつもと変わらぬ調子で、彼は言った。

「絵は、あんまり考えずに描けちゃうんだよね。」

ささいなやりとりだったが、はっきりと伝わってくるものがあった。二人の目前には同じ景色が広がっているのに、見えている景色は全く違うのだ。感じている景色はさらに異なる。彼の表現する景色は、私の想像を凌駕するのだ。

隣の同級生の口から聞いた言葉だけに、頭を揺さぶられる気分だった。芥川龍之介を読んでいるときは違った感慨が、どっと押し寄せてくる。

一つ一つの差に啞然とする。どこがどう違うのか、不思議で堪らなくなる。ただ私にわかるのは、才能は簡単に普通を超えていくものらしいということだけ。だから私は何度も嫉妬する。

しかし、幼い頃の私は「天才」だったのだ。子どもたちは皆「天才」として育てられる。私もそんな子どものうちの一人だった。才能はまだ眠っていて未発掘、可能性は無限大の身なのだ。色々な夢を持つことが許されていたし、自分も大人になったら何かになれるだろうと当然のように思っていた。

どうして、この頃の私に今の私を想像できただろう。だが、時が経ち振り返ってみると、私の幼少時代はとても幸せで残酷だ。

まず卒園アルバムに記されている夢は、お花屋さんだ。私の夢の原点はここにある。理由はたぶん、お花がきれいだからという単純なものだったと思う。百人一首に出会ってから、小学校二年生で夢は歌人へ変わった。オリジナルの百人一首を編んだこともある。中学生のときの夢は医師かつ作家だった。体の痛みを和らげる医師に、心の痛みを癒す作家。兼業したら、スゴい救世主になれる気がしていた。

子どもとしては順調だったが、一方で一つの人生を歩む者としては何もわかっていなかった。冬場、花屋さんは手が荒れてどうしようもないこと。いにしえ古の歌人たちは苦労を重ねて和歌や漢字を学び、政治の渦を泳ぎきって立身出世して初めて歌を残せたこと。医師になるのにどれだけの学力や学費が必要か。作家がどれだけ身を削って本を著しているか――。想像すらできていなかった。

さらに何よりも、苦労を上回る、情熱を伴った覚悟の存在を知らなかったのだ。それにやっと気づいたときには、私は高校生になっていた。私には今、夢がない。

自分にも何かしら才能があったらと考え始めた。『なるにはBOOKS』（ペリカン社）や、『夢ナビ！お仕事レポート』（朝日中高生新聞）、『仕事の流儀』（NHK）。何人もの大先輩たちの足跡を、一つ一つ懸命にたどるのだ。

毎回最後に、自分自身に問いかけてみる。「自分にしかできないことは、見出せただろうか。」

いつも答えは「ノー」だ。高校生の間、ずっと答えが出ないかもしれない。大学生になっても社会人になっても、この問いは残ったままかもしれない。その間にも私は、あらゆる才能に出会い、驚かされ、悩まされていくだろう。

しかし、どんなに辛く歯がゆくても、答えを探すのを止めないつもりだ。「自分が生み出した何か^が他者の活力や幸せになること」。それが私のあこがれだからだ。それは、お花屋さん、歌人、小説家、医師、学校の先生や友人から学んだことである。

みな先生であり尊敬する人というべきだろうが、私は思い切ってあこがれの人とい
たい。

もらってばかりきた力を、今度は私が。いつか誰かに、私の何かとして受け渡す
のだ。